



鈴

の

神さま

知野みさき

Misaki Chino

ポプラ社

常州大学图书馆
藏书章

神さま
知野みちの
Msaki Chino

知野みさき

(ちの・みさき)



1972年生まれ。

ミネソタ大学卒業。

東京でウェブ編集の仕事に携わったのちカナダに渡る。

現在、バンクーバー在住。

五大銀行のひとつにて内部監査員を務めている。

2012年、第4回角川春樹小説賞を受賞。

鈴の神さま

2012年7月13日 第1刷発行

2013年2月4日 第2刷発行

著者 知野みさき

発行者 坂井宏先

編集 倉澤紀久子

発行所 株式会社ポプラ社

〒160-8565 東京都新宿区大京町 22-1

【電話】03-3357-2212(営業) 03-3357-2305(編集)

0120-666-553(お客様相談室)

【ファックス】03-3359-2359(ご注文)

【振替】00140-3-149271

【一般書編集局ホームページ】<http://www.poplarbeech.com/>

組版 株式会社鷗来堂

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本は送料小社負担でお取替えいたします。ご面倒でも小社お客様相談室宛にご連絡ください。

受付時間は月～金曜日、9時～17時です(ただし祝祭日は除きます)。

読者の皆様からのお便りをお待ちしております。いただいたお便りは編集局から著者にお渡しいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

目次

鈴の神さま

5

引き出しの
ビー玉

83

ジッポと煙管

135

秋桜

195

十四年目の
夏休み

251



鈴の神さま



装画 おとないちあき

装幀 bookwall

目次

鈴の神さま

5

引き出しの
ビー玉

83

ジッポと煙管

135

秋桜

195

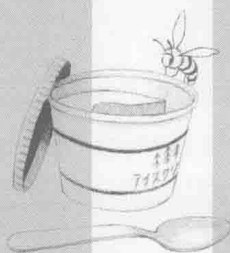
十四年目の
夏休み

251



鈴 の 神 さ ま

1
9
9
6
年
春



三月も終わりの陽ざしが柔らかい。

のどかな土曜の午後に、バスは緑の影をくぐりながら、山道を滑らかに走って行く。細く開けた窓からは、気持ちのいい風が舞い込んできて俺を眠りに誘う。

窓際のシートでうつらうつらしていたら、車内放送でいきなり名前を呼ばれた。

「有川^{ありかわ}さん。有川冬弥^{とうや}さん」

「はい……」

一瞬、自分がどこにいるのかわからなくて、俺はぼしぼしと瞬^{まばた}きを繰り返した。そうだ。

じいちゃんちに行くんだ……

朝イチに東京を出て、電車を乗り継いで七時間。バスに乗りかえて更に一時間。じいちゃんちは四国の、まさにど田舎という言葉がぴったりの場所にある。

がらがらの車内を歩いて前に行くと、運転手のおじさんがにつこり笑った。どこにでもいそうなオヤジなのに、制服をぴちつと着こなしていて好感度は高い。

「次で降りるようにと伝言です」

「でも俺、高野町^{たかのちょう}まで行くんですけど」

「うん。それがね、君のおじいさん、次の停留所に迎えに来てるそうだよ」

そうですか、と——他に言いようもないので——小さく返して俺は席に戻った。

さすが田舎。

こういうこともしょっちゅうなのか、他の客の微笑まじげな視線が逆に恥ずかしい。

朝から忙しげに、よそ見もせずに人が行きかっていた東京が、すごく遠くに感じられた。

考えてみれば、普段学校にいる時間を丸々電車でぼーつとしていたことになる。一眠りしたせいもあるけれど、座りっぱなしの疲れはなく、むしろ久しぶりにゆっくり休んだ気がして、俺は窓の外を眺めながら、少しだけ身体を伸ばした。

停留所に着くと、運転手が言った通りじいちゃんが待っていて、俺を見ると手を挙げた。

「冬弥、こつちだ」

「じいちゃん」

俺が歩み寄ると、じいちゃんはバスの方を見て会釈した。

「齊木^{さいき}さん、どうも」

「いやいや。いいねえ、お孫さんが遊びに来るなんて」

じいちゃんは運転手と短い言葉を交わし、手を振ってバスを見送った。バスに残っていた少ない乗客は、じいちゃんと、じいちゃんの車を見比べている。じいちゃんはひよろりとした長身で、姿勢もいい。なのにその背丈に似合わず、車はこの辺りでは珍しいミニだ。真っ黄色のそれは、ぴかぴかに磨き上げられていてカッコイイ。

「ちやうど隣町まで出る用事ができてね」

身体を折ってミニに乗り込みながら、じいちゃんが言った。

「営業所に電話したら、もうすぐここを通過するって言うからさ」

「びつくりした。こんなところで降ろされたら、俺、どうしたらいいのか判んないもん」

「だよなあ」

田舎の狭い道を、じいちゃんの運転するミニはするすると抜けていく。

「じいちゃんち、まだまだ遠いの？」

「いや、あと、そうだな、半時間くらいかな」

「充分遠いよ……」

俺がつぶやくように言うと、「ははは」と、じいちゃんは笑った。

じいちゃんが退職を機に高野町に引越したのは五年前で、ちょうど同居していたハル叔父さんの転職が決まった後だった。

無人になった東京の家は、今は父さんの従兄弟に当たる人に貸していて、じいちゃんは退職金と年金、それに家賃収入で悠々自適らしい。月に一度はじいちゃんが東京に遊びに来るから、今まであまり引越したという気がしなかったけれど、娘である母さんとはともかく、俺がじいちゃんちを訪ねるのは今日が初めてだ。

「本当に遠くからよく来たよ。電車だと一日仕事だものな。でも、電車もいいだろう？」

「まあね。じいちゃんが言った通り、富士山が結構近くに見えた。あと、橋。瀬戸大橋がすげ

かった」

でも——じいちゃんおススメの列車旅も悪くはなかったけれど——本当は今頃、俺は飛行機でパリへ向かっていた筈だった。

春の国際ジュニア・コンクール。

そのためにこの半年、俺はいろんなことを諦めながら練習に励んできた。けれど……

俺の複雑な心境を察したのか、じいちゃんは大仰ににつこりした。

「パリには敵わないが、日本の田舎も捨てたもんじゃないぞ」

「……そんなスゴイとこなの？」

自信満々なじいちゃんがおかしくて、俺はやつと小さく笑うことができた。

「そうだ。びつくりするぞ。——ほら」

ミニが左折して、目の前に黄色い景色が飛び込んできた。道の両脇に、鮮やかな黄色い花が咲き乱れている。道路の舗装がなくなつて、じいちゃんは少しスピードを落とした。

「連翹れんぎょうというんだ」

俺が訊く前にじいちゃんが言った。

「すごいだろう。ちょうどいい季節に来たよ。これがあるからこの家は、ここらでは連翹れんぎょうと呼ばれてるんだ」

「へー」

家の前の、少し広くなっている場所にじいちゃんは車を止めた。外に出ると、午後の光を浴びて、花の黄色がますます眩^{まぶ}しい。

家は木造平屋で、古く、でもしつかりした造りのものだった。門や塀こそないものの、藁葺きじゃなくて瓦屋根なのが、昔話というよりも時代劇っぽい。

「レトロ」

「そこがいいんだ」

俺の反応を楽しむように、じいちゃんが言った。

「すげー」

引き戸を開けて中に入ると、いきなりキッチン——いや、台所だ。しかもかなり広い。土足でいいってことは、これが土間ってやつなのかな。

「こっちは勝手口だ。玄関は向こうだけど、こっちの方が出入りには便利なんでね」

「すげー！」

靴を脱いで台所から居間に上がると、続きになっている広い部屋を歩き回る。

「畳だ、畳」

昔からある家とはかく、東京の新しい住宅はほとんどがフローリングだ。俺の家も例外じゃない。数えてみると、手前の居間は十二畳、続きになっている奥の部屋も十畳ある。六畳

一間にいろんなものがごっちゃに置かれてる俺の部屋とは、比べ物にならないくらいの開放感だ。

「奥の部屋を空けたから、冬弥はそこを使うといい」

「俺、畳の上で寝るの、林間学校以来だよ」

「喜んでもらえて嬉しいよ」

家は3LDK——というか、3L＋土間——で、太陽の位置からすると、多分、東向き。玄関もウチより広いけど、どこかしこまっていて、じいちゃんの言う通り、出入りするだけなら勝手口の方が断然使いやすそうだ。台所の裏手に風呂と洗面所があり、居間と書斎が背中合わせで、俺が使う部屋の奥はじいちゃんの寝室になっている。居間から俺の部屋を回って書斎まで、ぐるりと広い縁側が渡っていて、何だつけ？

——オモムキがある。

「……じいちゃんち、テレビないんだ？」

居間にテレビが見当たらないのにびびって、俺は訊いた。

「テレビはないが、パソコンがあるぞ」

「ふうん」

テレビがないというのは信じられないが、パソコンがあるというのは嬉しい。家にも一台あるけれど、それは父さんの仕事用で、俺は一切触らせてもらえないのだ。

見た目は古いのに、中は結構リフォームされてるみたいだった。風呂はタイル張りで、やっぱりレトロな感じだけど、台所と同じくガスだし、トイレも一応洋式で水洗だ。じいちゃんとあちこちを見てまわりながら、東京の便利な暮らしに慣れている俺は内心ほっとした。

早速パソコンを使わせてもらおうと、書斎に行って驚いた。書斎の壁際にぐるりと並んでいる本棚の一部がマンガで埋まっていたからだ。

「じいちゃん、マンガも読むんだ」

「読むぞー、何でも」

じいちゃんがおどけて答えるのに、俺は笑った。

さすが、じいちゃん。

商社勤めだったじいちゃんは、長いことヨーロッパ家具を輸入する部署に所属していて、若い時はバイヤーとしてヨーロッパ各地を飛び回っていた。俺が生まれた頃にはどつくに管理職になっていたけれど、それでも年に数回は海外出張に出ていたから、小さい頃はじいちゃんの土産と土産話がすごく楽しみだった。

英語はもちろん、フランス語とイタリア語も少しはできるみたいだし、好奇心旺盛で遊び心がある。子供の頃から歳に関係なく、どこまでも対等に扱ってくれるのが嬉しかったし、今でもそうだ。じいちゃんとは半世紀も年が離れているけれど、他の大人と接する時と違って、何となく、安心してフツーに話ができる。

じいちゃんもそれを知っていて、今回、母さんを説得してくれたんだろう。

少し早い晩ごはんの用意は、じいちゃんがしてくれた。

俺も形ばかり手伝ったものの、料理なんてほとんどしたことがないから、自分でもとろくて情けない。

食卓に並んだものは、普段食べつけていない野菜中心の和食だったけど、これが意外に美味しい。町の人が分けてくれるというお米は、炊いたらぴかぴかで噛み応えがあるし、じいちゃんの家庭菜園でできたというサヤエンドウも玉ねぎも、とても今まで俺が食べてきたものと同じものとは思えないくらい旨味がある。

「冬弥が今まで食べてきたのは、単に古かったのさ」と、じいちゃんは笑う。

「えー、でもウチのだって、産地直送宅配ってヤツだよ。新鮮さがウリの。母さん、そういうところはこだわるからさ」

「新鮮さが違う。こつちは五分前に畑から採ってきたばかりだ」

そう言ってじいちゃんが薄くスライスしてくれた玉ねぎは、みずみずしくて、玉ねぎとは思えないくらい甘かった。生の玉ねぎなんて今までどちらかというと苦手だったのに、これだけ甘いとポン酢だけでさくさく食べられる。

食後はまだ明るいうちに風呂に入り、風呂上がりにじいちゃんが買っておいてくれたアイスを食べながら近所を少し散歩した。一番近い「お隣さん」でさえ、一キロは離れているという。